

氏名	おかみほこ 岡美穂子
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博第343号
学位授与の日付	平成18年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	近世初期の長崎とマカオ ——日本関係南欧史料の分析から——

論文調査委員 (主査) 教授 E.ヨリッセン 教授 川島昭夫 教授 松田 清

論文内容の要旨

本論文は、従来外国語史料に拠る日本史研究が、情報提供という副次的な立場にとどまっていたのに対し、それが日本史研究の本流に如何に積極的にアプローチできるかを提示している。申請者は現在の日本の対外関係史研究が、東アジア世界観に偏重しがちな事実に着目し、その問題点を指摘しつつ、少なくとも近世初期の徳川幕府の対外関係政策は当時のヨーロッパ勢力の進出によるアジアの社会的変化と関係している事実を認めなければならないと主張している。

近世初期の対外史研究、とくに「鎖国」に関する研究は明治維新以降の西洋文明との対峙という形で進められ、「鎖国得失論」に偏重しがちであった。さらには1960年代に岩生成一が欧文文献を駆使した「鎖国」概論を公表し、「鎖国」のプロセスがあたかも西洋との関係のみで進められたという印象が定着した。しかしながら1970年代には朝尾直弘の「鎖国制の成立」発表以後、徳川幕府の「鎖国」政策が国内の諸問題や東アジアの秩序と相互緊密な関係によって打ち出されたものであるとの見解が定着し、これ以後「アジアのなかの日本」の視点が日本の対外史研究には不可欠とされてきた。申請者は欧文史料研究がこれまでこれらの潮流に主体的に関わることなく、資料提供するにとどまっていることを問題として挙げ、日本史研究における欧文史料の価値が再評価されるべきであると訴えている。

本論文はテーマごとに三部に分けられ、第一部「東アジアとポルトガル人」の第一章「東アジア海域世界における港市マカオ」では欧文史料から導き出される当時の東アジア海域の特殊な様相を描き出している。本章で用いられる史料は東アジアとポルトガル人の進出に関する基本史料であるが、申請者は再翻訳を含めて入念に史料を検討し、日本へのポルトガル人の漂着に関しても新説の可能性を提示している。この章の本論全体の中で担う役割は「欧文史料を用いても《西洋主義史観》に偏重しない研究が可能であることの提示」である。

第二部「投銀」は第二章「日本交易時代のマカオの政治と経済」と第三章「投銀—長崎商人とマカオ商人」で構成される。第二章では、マカオ創成期の社会的問題とともに、港市マカオとその周辺海域を取り巻く環境についての問題を提起し、マカオが東アジアの金融センターとしての存在価値を高めていく過程に着目している。なかでも日本＝マカオ間交易で用いられたレスポンデンシア (respondência) という金融システムがマカオ社会とその周辺地域に与えた影響について、当時の欧文史料を用いて詳細に分析している。第三章ではより具体的にレスポンデンシアを含めた当時の長崎＝マカオ間の「投銀」金融の構造を明らかにし、そこに深く関与していた日本とマカオの商人たちの相関を描いている。なかでも朱印船貿易家で長崎代官であった末次平蔵のこの金融構造の中での役割に着目し、彼が持ちえた権力と貿易との関係について言及している。さらにレスポンデンシアにはマカオ市による集約的な契約と、ポルトガル商人個人による契約とが存在した事実を指摘している。

第三部「宗教と貿易」は第四章「マカオの宗教権力—マカオ聖パウロ・コレジオの役割」、第五章「ツツ・ロドリゲスの日本プロクラドル覚書—プロクラドルと禁教後のイエズス会貿易」、第六章「寛永時代の長崎—パウロ・ドス・サントス事件」の三章で構成される。第四章では1620年代まで集合権力の存在しなかったマカオにおいてイエズス会等のキリスト

教権力が社会的統制に非常に大きな役割を果たしていたことを明らかにしている。また日本＝マカオ間の交易収益はイエズス会のコレジオ（高等学院）に保管され、そこには収益保管庫としてカーザ（建物）が建設されたことをはじめ、イエズス会が宗教的指導に留まらない役割をマカオ内で持ちえたことが明らかとなる。第五章ではイエズス会の会計・貿易担当の役職であるプロクラドルに関する重要な史料を日本に初めて紹介し、当時のイエズス会貿易の実態を詳しく解析するとともに、幕府による禁教の原因とイエズス会貿易との関連性についても、新しい見解を提示している。第六章は寛永年間の徳川幕府の対外政策の変遷、いわゆる「鎖国」研究の中で、ほとんど取り上げられたことのない事件、すなわち長崎での船荷改めの中で寛永十一年（1634）にマカオ在住邦人司祭の書状が発覚した事件を分析し、この事件が幕府の対外政策に与えた大きな影響を詳しく考察している。この書状発覚はポルトガル人商人が厳しい禁教政策の中なおも潜伏宣教師の活動を幫助していた事実を露見させたのみならず、長崎奉行竹中重義の職務上の不正、長崎支配の墮落と直結していた点において、幕府に大きな動揺を与えたと考えられる。さらには寛永十六年のポルトガル船の追放令は、寛永十年以降段階的に修正を加えられた長崎奉行宛職務大綱（いわゆる第一次～第四次鎖国令）とは全く性質の異なるもので、寛永三年（1626）にポルトガル人に与えられた掟（fachaque）に対応したものであるとの見解を披露している。

最後に、以上の諸テーマに対する多角的な視野からの研究は全体として、欧文史料に拠りながらも西洋主義史観にとらわれず、東アジア世界にも閉じこもらない、自由で実証的な歴史研究が可能であることの一例証であると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文の最も特徴的な点は、ほとんどの章において、これまでの近世初期の対外関係やキリシタン史に関わる新出史料を申請者が丹念に翻訳し、各章の中心的史料として用いている点である。いずれの史料も日本の対外関係史を刷新する可能性を秘めていると思われるほどに重要である。これらの史料は申請者が南欧の各文書館で調査をおこない、新たに見出したという点でも、本博士論文にかけられた申請者の労力は相当なものであると判断される。また翻訳・史料操作の技術においても、意識を極力避け、原文史料・翻刻史料とともに紹介しているという点で、史料を軽んじない姿勢が評価できる。

本論文は、南欧史料を用いて近世初期の対外史研究を試みたものであるが、申請者が主張するように外国人の目によって書かれた日本に関する情報を用いて、正確に近世初期の日本を取り巻く海外情勢を描き出すことが全体的な目標となっている。また副次的なテーマとして、日本の近世初期の対外史研究で最も重要な問題である「鎖国」を取り巻く議論に関して、これまで南欧史料を操作する研究者たちが直接的な議論に加わることを避けてきたことを挙げ、海外史料による「情報」提供にとどまらず、積極的に議論に参加できる可能性があることを示そうとしている。もちろん申請者のビジョンには近年の対外関係史研究の基本的な研究姿勢である「アジアのなかの日本」というコンセプトは存在している。しかしながら申請者は、歴史的事実を無視して歴史・政治によるイデオロギー的な面だけで、アジア世界観にこだわりすぎる研究姿勢を批判し、当時のアジアが世界的な近代への胎動に巻き込まれて、各地域がそれぞれの刺激を受けて変化したことに注視せねばならないと訴えている。近世初期の日本を取り巻く環境を考察するにあたって、現在主流の視点を乗り越えて、歴史的事実に基づいて、新たなビジョンを提案する申請者の姿勢は、時代への逆行ではなく勇氣ある革新であると考えられる。

論文は3部6章で構成され、各部ごとの統一テーマで近世初期のマカオと長崎を論じている。おそらく近世初期の対外関係史研究の中で、これほどマカオに焦点を当てて、その社会的な構造の変革と日本との交易を絡めて叙述した研究はないのではないかと考える。申請者は外交史である以上、相手地域に対する深い考察が不可欠であると認識している。このようなビジョンはこれまでの日本史研究では希少であったのではなかろうか。

第一部「東アジアとポルトガル人」の唯一の章である第一章では、16世紀中葉ポルトガル人が東アジアに進出してきた時代を取り上げ、この進出と当時の後期倭寇を巡る東アジア海域の情勢との関連を論じている。この章は本論文全体の問題提起的部分として、申請者の視点を明確に表現しているとともに、日本でもよく知られた文学作品であるメンデス・ピントの『東洋遍歴記』を含むその他の欧文基本史料の分析と再評価をおこなっている。

第二部「投銀」は第二章と第三章で構成され、それぞれマカオと長崎において、この南蛮貿易を支えた金融方法が持ちえた社会的意義とその構造を解明している。このテーマは申請者が2000年に本学に提出した修士学位論文をその基幹としているが、その後の研究の発展により史料が新たに加えられ分析も充実している。

第三部「宗教と貿易」は第四章から第六章の三章で構成される。申請者の最も力を注いだ部分である。第四章はマカオのイエズス会コレジオに、1620年代日本＝マカオ間貿易の交易収益全額が保管される金庫が設置されたミステリーを皮切りに、マカオの政治経済と宗教界が持った密接な繋がりを明らかにしている。第五章ではイエズス会と南蛮貿易の関係を具体的に提示する興味深い新史料をはじめ全文紹介し、その作者を長年長崎のイエズス会財政担当パードレの職にあって、多くの日本文化や日本語に関する著作を遺したツツ・ロドリゲスであると比定した上で、徳川幕府の禁教令にも大きく関わる問題を論じている。第六章では寛永年間の幕府の対外統制の大改革、いわゆる「鎖国」のプロセスに、パウロ・ドス・サントスというマカオ在住の神父の書状発覚事件が、当時の長崎奉行竹中重義の不正と絡み合って、幕府の統制意識に大きな変化を生じさせたことを述べている。この事件はいわゆる「鎖国」研究の中では全く取り上げられたことのない事件であり、この事件がそれほどまでに重要な意味を持ったという主張は、発表当時（2004年史学会大会）、かなりの反響を呼んだ。

各章が個別に公刊された論文であるために、全体的な結論よりは各章ごとの結論を重視した傾向が見られるが、現在の学界の潮流に対する批判という形で、各章の持つ個性と異なるテーマによる内容をひとつの結論にまとめ上げようとした申請者の努力は認められるべきであろう。さらには論文の趣旨として世界史上のポルトガル帝国についての意識を持つことがのぞましいが、論文中ではより詳細に申請者の見解が示されてもよかった。

しかしながら新史料の紹介や新しい歴史事実の解明もさることながら、これまで日本史研究において副次的な位置にあった外国語史料を用いた研究の価値を飛躍的に高める可能性があるという点で、本論文は大いに革新的である。また本論文は日本史研究にとどまらず、文明論研究においても様々な新しい情報を提供しているという点で評価されるべきである（とくに第五・第六章）。

本学位申請論文は、歴史文化を通文化的な広がりにおいてとらえる人文学的な新研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻歴史文化地域論講座にふさわしい内容を備えたものであり、高く評価すべき研究であると言える。また、その内容に鑑みて、今後の日欧交渉史研究に多大の貢献をするものと期待できる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成18年6月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。